



マルバタラヨウ



内田町の大イチョウ



歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 歴史と文化財を知る見学会 「水野の天然記念物」

主催：瀬戸市・（公財）瀬戸市文化振興財団

日時：令和5年12月3日（日） 9時30分 瀬戸市文化センター北駐車場集合・バス出発
 9時50分 上水野バス降車 水北町のイチョウ・水野代官所跡・水野御殿跡
 ・北脇のムクノキ解説（10時30分出発）
 10時35分 三社大明神社前 三社大明神社・マルバタラヨウ解説（11時05分発）
 11時10分 中水野駅前 内田町遺跡・内田町のイチョウ解説（11時40分出発）
 12時00分 文化センター到着・解散予定

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきものの生産
の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

BC2700～2000（縄文時代後期）内田町遺跡 狩猟用落とし穴

4世紀（古墳時代初頭）内田町遺跡 方形周溝墓築造

本地大塚古墳（西本地町2丁目）

宮地古墳群（上之山町2丁目）

広久手30号窯跡
 木造十一面観音菩薩立像（下半田川町）県
 木造阿弥陀如来立像（下半田川町）県

古瀬戸瓶子（寺本町）

陶製狛犬（深川町）国

瀬戸窯跡【小長曾窯跡】（東白坂町）国
 永享年銘梵鐘
 聖徳太子絵伝（塩草町）

定光寺本堂（定光寺町）国
 織田信長制札（窯町）
 菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]
 瀬戸窯跡【瓶子窯跡】（鳳山町）国
 源敬公廟（定光寺町）国
 笠原村・両半田川村国境争論絵図（東松山町）
 石造地藏菩薩立像（片草町）

陶質十六羅漢塑像（寺本町）
 六角陶碑（藤四郎町）
 旧山繁商店（仲切町・深川町）国登
 瀬戸永泉教会礼拝堂建造（杉塚町）国登
 陶製梵鐘（深川町）

近代

古墳	5世紀	須恵器・ 飛鳥
	6世紀	
	7世紀	
奈良	8世紀	灰釉陶器・ 平安
鎌倉	9世紀	
	10世紀	
	11世紀	山茶碗・ 南北朝
室町	12世紀	
	13世紀	
戦国	14世紀	古瀬戸
	15世紀	
	16世紀	
江戸	17世紀	大窯製品・ 安土・桃山
近代	18世紀	
	19世紀	
	20世紀	

12世紀中葉～13世紀初頭 内田町遺跡（第1期）

13世紀前葉～14世紀前葉 内田町遺跡（第2期）

14世紀後葉～15世紀前葉 内田町遺跡（第3期）

1650（慶安3）年 徳川義直逝去
 1713（正徳3）年 『鸚鵡籠中記』『御殿は「御台所」ばかりのこり…』
 1740（天文5）年 御殿の場所に御林方奉行所が引越し
 1767（明和4）年 明和大洪水（御林方奉行所・水野家屋敷が山側へ移る
 下水野村郷島が流されイチョウのみ残る）

1996（平成8）年 タラヨウとモチノキの雑種
 （マルバタラヨウ）が新木本植物として学会誌に掲載

水野の 2 つの大イチョウ (No. 1・2)



全景 (南より)

水北町のイチョウ (瀬戸の名木 1 幹周 395cm)

市内で最も幹周りの大きいイチョウである。江戸時代、近くに御林方奉行所があり、このイチョウはそこに仕えていた人の庭に植えられていたといわれる。樹齢約 200 年といわれる。(瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸の名木』より (一部加筆))



北側 幹表面の不定根



全景 (北東より)

内田町のイチョウ (瀬戸の名木 2 幹周 309cm)

明和 4 年 (1767) 7 月の大洪水では、当時の下水野村の郷島 (現在は本郷町) 部落総てが流失した。しかし、このイチョウだけが残ったという言い伝えがある。中国原産の裸子植物。国内のイチョウはすべて植栽されたものである。イチョウには雌雄があるが、このイチョウは雌株で、秋には銀杏をつける。かつて神明神社があった場所にあり、神社のご神木であっただろう。地域の区画整理事業により伐採される可能性があるが、他にかけがえない地域の貴重な文化財であるといえる。

イチョウ *Ginkgo biloba*



水北町のイチョウ 雌木♀

幹囲 411cm (2017 1997 年は 395)

内田町のイチョウ 雌木♀

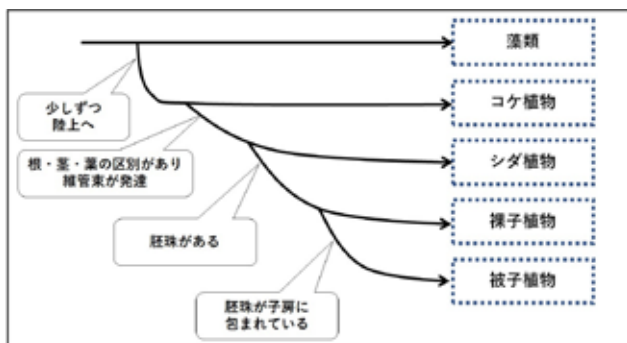
幹囲 309cm (2018 1997 年に 295)

生きる化石

ペルム紀 2 億 4500 万年前頃の地層から発掘され、ジュラ紀には世界各地に広がっていたが、かつてシダと思われていた。日本では 1894 年に石川県の手取層から産出。

精子の発見

1896 年 9 月 9 日、平瀬作五郎（「らんまん」では画工野宮）により絨毛を使って泳ぐ姿が発見されたことにより、シダやコケと同様に繁殖に水を必要とすることが判明した。



精子が泳ぐ イチョウの不思議 | ミクロワールド | NHK for School



繁殖

生殖を銀杏の内部で行うことで、孢子より栄養に富む大きな種子を形成することができ、また乾燥にも耐えることから中生代に世界に広まっ

た。恐竜も種子を運んだと考えられている。



衰退

被子植物の繁栄、気候の変動、種子を運ぶ動物の絶滅とともにイチョウは各地で絶滅し、分布を狭め、中国南部の一部地域にのみ残った。中国の自生地も真の自生地であるかは不明。

復活

漢方薬・食料・木材としての利用価値が見いだされ、各地に植栽された。日本には室町時代に渡来した。



鎌倉市鶴岡八幡宮のイチョウ。樹齢 1000 年とされたが 2010 年に倒伏。500 年と判明

繁木 喰上人による三十三観音 (1803 小千谷市)



キューガーデンのイチョウ "Old Lion" 1759 年に植栽されたもの。



おはやしかたぶぎょうしょ 御林方奉行所跡と御殿

「御林」とは、村人が藩主に無断で狩猟をしたり、樹木の伐採や薬草やキノコを採取する行為を禁止した山林のことである。尾張藩の御林を管理する役所が旧上水野村北脇（現・瀬戸市

水北町）に置かれていた。天保年間の上水野村絵図には八幡宮の東側山麓に「御林方役所」と奉行職を務めた「水野権平様御屋敷」が並んで描かれている。



天保12年上水野村絵図（『瀬戸市史 資料編1 村絵図』より）

尾張藩の初代藩主となった徳川義直は狩猟を好み、度々水野の山々へ遊猟で訪れた。その際に御狩り場の案内役として召し出されたのが、水野太左衛門致重であった。致重に御樹木場等を下し置かれ、役名は無いが初めて「御林御預ヶ被遊御側向同様相勤（おはやしおあずけあそばされおそばむきどうようあいつとめる）」よう仰せ付けられて、切米20石で召し抱えられた。義直は寛永18年（1641年）水野久之丞正勝（致重嫡男）邸の敷地内に行殿「水野御殿」を建てて遊猟のときに宿泊した。

水野御殿の敷地面積は3,300坪（東西56間・南北60間）で、敷地内には2反6畝3歩（783坪）の手作りの畑と竹藪があり、寝所・大広間・祐筆部屋・御膳場・風呂を備え、別棟に御厩・御網蔵・御鷹部屋・番所・馬立場などが設けられた本格的な大名屋敷であった。

その後、五代将軍徳川綱吉が「生類憐みの令」を発すると尾張藩も狩猟の自粛を余儀なくされ、尾張藩では財政儉約なども奨励されて正徳

3年（1713年）前後に水野御殿は取り壊された。ところが享保8年（1723年）5月付尾張藩老中の書付には、同年に新御殿が復興されたことが記され、尾張藩では後々まで鹿狩りなどの遊猟が続けられたことがわかる。

幕府の「生類憐みの令」で狩猟が自粛され、水野御案内役の主な仕事は御狩御用から御林管理という山林行政の分野へ移され、御林内に自生する樹木は当然のこと、茸（きのこ）類や薬草木等の林産物管理が重要な仕事となった。正徳6年（1716年）4月28日に水野に御林方奉行所を設置され、水野権平正秀（久之丞正勝嫡男）が初代の御林方奉行に任命された。

元文5年（1740年）3月15日御林方奉行所が水野御殿へ引越し、水野御殿の施設は使用目的が御林方奉行所になった。

尾張徇行記に「水野権平宅は水野川の北山（上水野八幡神社東側）にある。寛文村々覚書に御殿屋敷が一ヶ所あり、そこに御庭番が一人居り、水野久之丞屋敷の本田高の内の三石一合の土地

を証文引（免税）にして尾張藩へ渡したと記され、水野権平の旧宅は今の居宅より南の方の平地にあったが、明和4年（1767年）の洪水の後に今の土地へ家を移した」と記されているので、村絵図に示されている御林方奉行所や水野権平屋敷は明和4年（1767）大洪水後に移転新築された建物であり、この時は既に行殿の施設ではなかった。

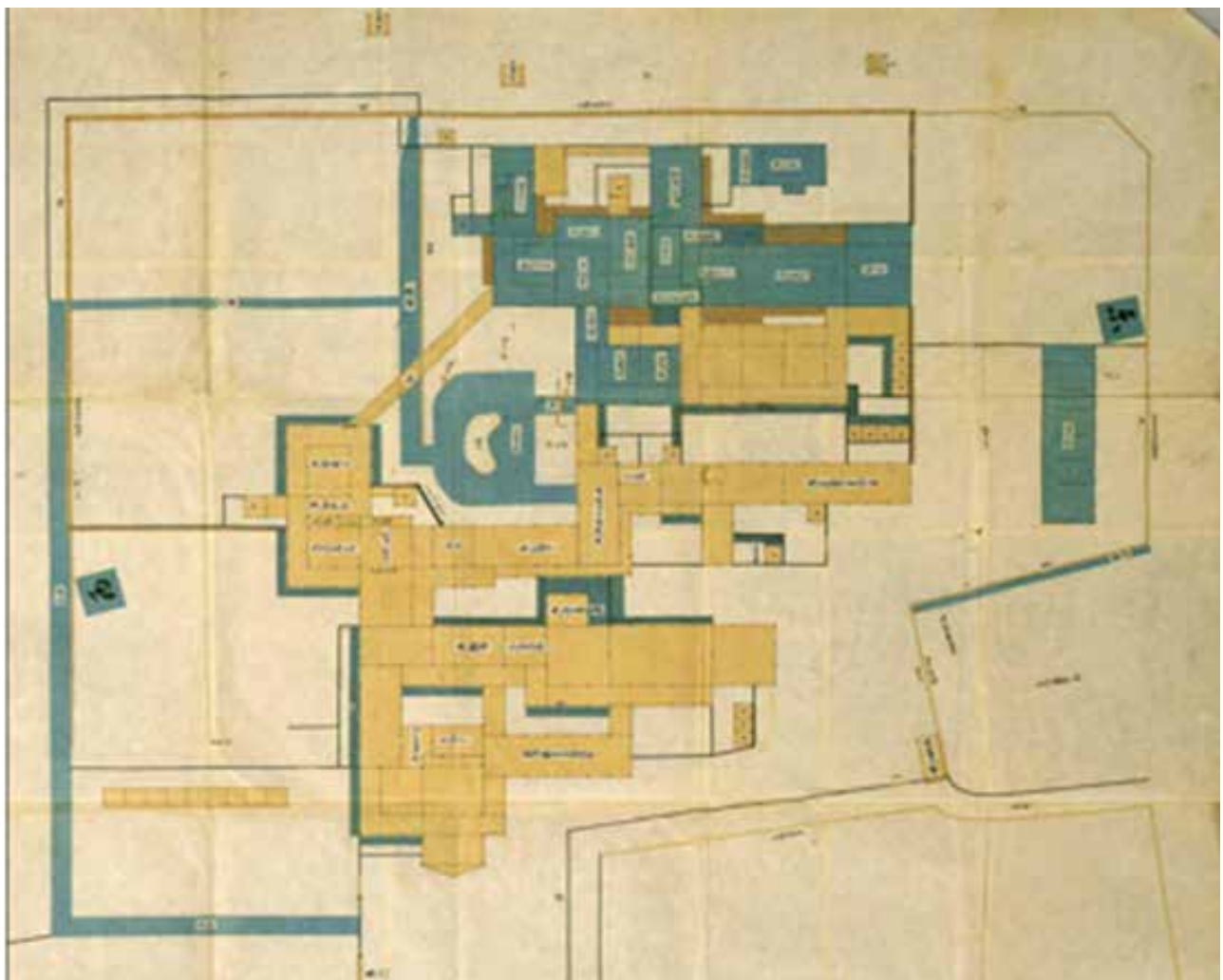
当初の尾張藩の山林行政は御国奉行配下の「山方野方奉行」と御用人配下の「御林方奉行」の2系統による管理体制であり、御林方奉行は愛知郡および春日井郡の御林13,400町歩を管轄していたが、江戸時代中期に尾張藩では大規模な林政改革が行われ、山方野方奉行が管轄していた知多郡の御林を安永9年（1780年）11月に、美濃国の御林を寛政2年（1790年）に御林方奉行の管轄に組み入れて山方野方奉行は廃止され、尾張国全域と上有知（こうづち）（現・岐阜県美濃市）までの美濃国の広大な御林を御林方奉行が一元管理することになった。

御林方奉行には水野権平家が世襲で就き、幕末まで続いた。

奉行所の役人も、元禄時代の分限帳には足軽10人、中間10人、御案内役（山同心）10人の合計30人と記してあるが、天明元年（1781年）8月聞書には手代5人、手代並1人、御案内25人、同見習7人、足軽11人、知多郡山廻り11人、同見習10人、定光寺山廻り2人、濃州境通り下見2人、休所・道具類引請け御案内3人、休所・道具類引請け番人7人、役所小使中間1人、入尾嶋樹木専苗木専2人、野指差免下見7人の合計94人が記してある。

明治維新で御林方奉行所は水野代官所とともに廃止されて、新たに設置された東方総管所の下で山同心組として存続したが、明治4年（1871）7月14日の廃藩置県で尾張藩の御林が愛知県へ引き渡され、その管理は愛知県の官林監守人が担当したので山同心組は自然消滅した。

明治時代になると御林方奉行所が取り壊されて、その敷地は民間へ譲渡されて土塀や石垣は撤去され、堀状の池も埋め立てられた。^{りげん}水野で語り伝えられている次のような里諺がある。



名古屋蓬左文庫所蔵・水野新御殿之図

- 「山の中でも水野は城下、^{じ かたやまかた}地方山方両役所」
- ・「^{じ かた}地方役所」とは、地域行政を担う
「水野代官所」のことをいう。
 - ・「^{やまかた}山方役所」とは、山林行政を担う
「御林方奉行所」のことをいう。

尾張藩では、ほとんどの役所が名古屋城下(中区丸の内周辺)に集まっていたが、水野にも2つの役所があったので、水野の人々は「水野は名古屋城から遠い山の中にあるが、2つも役所があるので、まるで城下町のような。」と言

表し、この地方の政治や文化の中心地は水野だと言わんばかりの自慢話が語り継がれている。

【参考文献】

張州府志、
尾張徇行記、
蓬州旧勝録、
瀬戸市史通史編上、同資料編四、
瀬戸市近世文書集第四集・第七集、
御林方奉行所年代別分限帳、
水野のあゆみ、等



鹿狩絵図(名古屋市水野家所蔵)(『瀬戸市史 資料編4 近世』より)

北脇のムクノキ (No. 37)

ムクノキ *Aphananthe aspera*



アサ科の落葉高木

アジアに分布する。

果実が甘く美味であるため特にムクドリが好んで餌にする。樹皮は下から大きく剥がれ、反り上がることが多い。

葉にはケイ酸質の針状の粗い (aspera) 毛が生え、ざらつくことから研磨剤として使われる。

成長は早く、大木になるため各地で天然記念物に指定されている。北脇の大ムクとして「愛知の名木」「瀬戸の名木」に選定されているが、保護の対象にはなっていない。



2016 年の樹形

瀬戸市内の分布

成木が分布するのは狭義の赤津地区、洞街道、鹿乗地区など集落の内。本来、エノキ、ムクノキは日本に自生する樹木だが、瀬戸市内の森林に自生する成木はほぼ皆無である。古墳時代の花粉分析にもあまり検出されないことから、本来個体数は少なく、食料や材としての有用性から各地に持ちこまれたものと考えられる。

エノキ *Celtis sinensis*



アサ科の落葉高木。東アジアに分布する。

果実が甘く美味である。樹皮は剥がれにくい。葉の表面はなめらか。一説に天秤棒などの柄に利用するため植えられ、そのため「柄の木」と呼ばれたとも。江戸時代に一里塚に植栽されたが、徳川秀忠が「良い木を植えよ」と命じたのを聞き違えたともいわれる。

成長は早く、大木になるため各地で天然記念物に指定されている。



三社大明神社のマルバタラヨウ (No. 82)

マルバタラヨウ *Ilex integra x latifolia*



マルバタラヨウ



片親タラヨウの結実 マルバタラヨウの結実

モチノキ科の常緑広葉樹。

1984 年、水野在住の日比野修氏が発見、鹿児島大学の初島名誉教授が学会誌に発表した。タラヨウとモチノキが自然交雑した株。瀬戸市指定天然記念物。

片親のタラヨウは葉の裏を尖ったもので押すと跡が残る。ハガキの木とも。葉に鋸歯がある。

モチノキ 葉に鋸歯はない。樹皮からトリモチが作られた。境内に数本自生する。

マルバタラヨウの結実はまれ。もし結実しても、系統の維持するには不十分であるため別種として進化した。

瀬戸市内の分布

モチノキとタラヨウは暖地の森林に自生するほか屋敷などに防犯、防火の効果を期待して植栽される。瀬戸市内ではモチノキは自然下に大木が数本見られるが、タラヨウは自然下に 1 本のみで、ほかはすべて屋敷林、公園。



タラヨウ



モチノキ



● モチノキ

● タラヨウ

マルバタラヨウ分布

名城大学演習林内(自然分布)、掛川地区八剣社、赤津地区大目神社など(植栽)で見られる。

その他の交雑例



自然交雑 トウカイコモウセンゴケ(モウセンゴケ×コモウセンゴケ)、イヌムラサキシキブ(ムラサキシキブ×ヤブムラサキ)、雑種コブシ(シデコブシ×。タムシバ)など

人工交配? ソメイヨシノ(エドヒガン×オオシマザクラ)

意図しない雑種形成 アイグロマツ(クロマツ×アカマツ)、雑種オオサンショウウオ(オオサンショウウオ×チュウゴクオオサンショウウオ)、モンスターハリヨ(ハリヨ×イトヨ)など

ツブラジイと神域

マルバタラヨウは三社大明神社の神域にある。神域は自然遷移に任すのが鉄則だが、文化財の保護も重要。隣接するツブラジイがマルバタラヨウを被陰しており、衰退させているときはツブラジイの剪定・伐採も検討する必要がある。

コース外で見られる水野の重要な植物

クロガネモチ *Ilex. Rotunda*

内田町1丁目

モチノキ、タラヨウと同じモチノキ科の常緑樹。昭和44年に市民投票で瀬戸市の木として選定された。雌雄異株で赤い実がつく雌株が好



まれる。

尾張藩種によって奨励されたため各地に植栽されたが、自然分布はほぼ皆無。

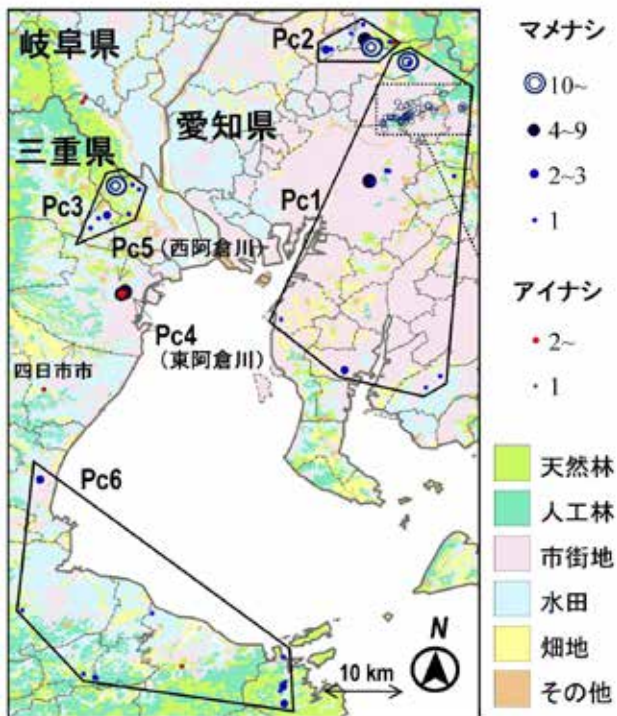


水南小のマメナシ

水南町（水南小学校内）

瀬戸市指定天然記念物。極東に分布する。

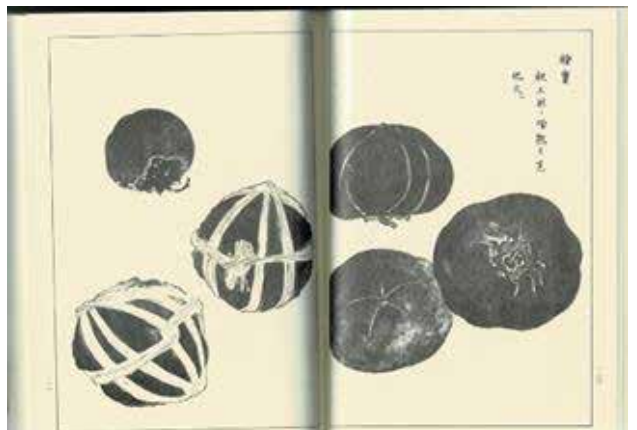
サクラと同時に咲き、果実は直径 1 センチ強。
絶滅危惧種。



マメナシ等の現存個体・個体群の分布状況と
DNA 解析結果に基づいて区分した集団
(加藤珠理ほか 2014「希少種マメナシの地理的遺伝構造の
評価」『森林遺伝育種第3巻』より(一部加筆))

三沢町のアカツガキ

国内で 1000 種にわたる柿の品種のうち、瀬戸市発生の唯一の品種。



内田町遺跡

市域中部を流れる水野川は、蛇行を繰り返して水野盆地内を西へ流れ、水野盆地西端で南に大きくカーブし、再び北に向って庄内川と合流します。本遺跡はそのカーブした右岸にあたり、北側の丘陵麓までの南北約400m、東西約750mの広い範囲に遺物散布地が広がっています。遺跡範囲の中央を南北に愛知環状鉄道が縦断しており、その西側について、平成10年度及び11年度に発掘調査が行われました。調査では、縄文時代から中世に至る遺構・遺物が確認されており、長期にわたって集落として利用されてきた地域であったことが明らかになりました。

発掘調査では主に縄文時代、古墳時代前期、中世の3つの時期の遺構や遺物が検出されました。この内縄文時代は、調査範囲の中でも主に西側のA・B区で確認されました。確認された遺構には落とし穴状遺構、土坑、小穴群などがあります。落とし穴状遺構はA区で3基まとめて見つかっており、平面形はいず

れも直径1.3m～1.4mの楕円形となります。床面中央部に直径25cm程度の小穴があり、細木が数本立てられた痕跡がみられました。この細木は、先端を尖らせ、尖った部分を上にして埋め込む、いわゆる逆茂木と考えられ、狩猟のための落とし穴として掘られた遺構であると思われます。一般的に落とし穴は丘陵尾根や斜面など猪・鹿などの通り道に掘られ、内田町遺跡のように沖積地で確認された例はみられません。水辺などに来る獲物を対象とした落とし穴とも考えられますが、愛知県内では最初の検出例であり、類似遺構の発見が期待されています。

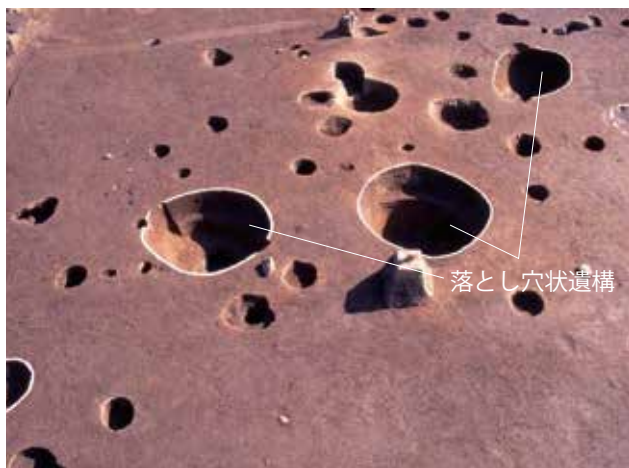
土坑は38基検出されていますが、その性格は不明です。ただし、やや深い掘り込みを持つものがみられ、これについては完形の土器や特殊な注口土器がまとまって出土していることから、これらの遺物を埋納した土坑墓であるとも考えられます。

遺物は、遺構内及び遺物包含層より出土し



内田町遺跡の位置と調査区

ており、特にA区南側からB区北側に集中していました。時期的には縄文時代中期末から後期中葉（約4700年前～4000年前）に位置付けられ、特に後期初頭から前葉にかけてのものが中心となります。その内容は鉢類を主体とした縄文土器や、石鏃・石錐・石匙などの小型石器、打製石斧などの大型石器があり、特殊なものとして石棒が1点出土しています。



縄文時代の遺構

古墳時代前期は、D区より方形周溝墓と考えられる溝の一部が検出されました。主体部（棺を納める場所）は調査区外に所在すると思われるため不明ですが、周溝の一边と土盛の一部が確認されており、周溝内より古墳時代初頭の土器が出土しています。

中世の遺構・遺物は全区で検出されています。



方形周溝墓

すが、明確に建物跡を伴う遺構群はA・B区で確認されました。遺構群は、溝、多数の柱穴、井戸、土坑などで構成され、柱穴群の検討により6軒の掘立柱建物跡、10列の柵列が確認されました。これらの遺構群は、出土する遺物の時期により12世紀中葉～13世紀初頭(1期)、13世紀前葉～14世紀前葉(2期)、14世紀後葉～15世紀前葉(3期)の3期に区分されます。

1期は南北を溝で画され、北側に3軒の掘立柱建物跡が隣接して存在しました。その内1軒は2重に柱穴が巡る^{ひざしつき}庇付掘立柱建物で、主屋と考えられます。

2期はやはり南北を溝で画され、2軒の掘立柱建物跡が1期よりやや南側に存在しました。建物跡の北側には井戸跡や大型の土坑が集中し、更に北側には5列の柵列が南北にみられます。

3期では北側の溝が消滅して、その代わり



中世の遺構群（柱穴など）



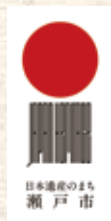
中世屋敷の南側区画溝

3 期にわたる中世遺構群の構造は基本的には共通しており、南北を溝あるいは柵列で画された屋敷地と考えられます。区画北側は耕作地と考えられ、屋敷地とその所有となる耕作地のセットを一単位とする集落構造が考え

中世の出土遺物は山茶碗、古瀬戸、大窯製品などいわゆる地元で生産された陶磁器類が主体となりますが、青磁碗や白磁玉縁碗など中国陶磁もみられ、高級陶磁器を所有し得た階層の屋敷地であったと考えられます。



瀬戸市歴史文化基本構想を推進するため、
瀬戸市の各地区から
歴史文化に詳しい市民が参加して
ワークショップを行い、
「瀬戸」の重要な文化遺産のものがたりを
4つ選び出しました。



本事業は、平成31年度歴史文化基本構想を活用した観光拠点づくり事業（文化芸術振興費補助金）を活用して実施しています。

お問い合わせ

瀬戸市歴史文化基本構想を活用した
観光拠点形成のための協議会

0561-84-1093

〔瀬戸市地域振興部文化課〕

せとの魅力は「せともの」だけじゃない!?
市民が推す四つのせと物がたり



新時代の
ツクリテは
何処に？

せと物がたり 1

尾張・三河・美濃
三国の
交わる場所



せと物がたり 2



美しい自然に
親しむ



せと物がたり 3

マメ女医

祭りと伝承



せと物がたり 4



物がたりの舞台を巡りながら、
せとの魅力を再発見してみよう!
新開設!「せと物がたり」はコチラから